

図書館史稿編集を振り返って

ながの ひろえ
長野 裕恵

(三田メディアセンター)

1 はじめに

慶應義塾図書館開館 100 年を記念して、『慶應義塾図書館史稿 1970-2012』(以下、『図書館史稿』)が 2012 年 3 月に刊行された。伊藤弥之助著『慶應義塾図書館史』(以下、『図書館史』)の続編を編纂するというプロジェクトが最初に立ち上がったのは、義塾創立 150 年に向けて、様々な記念事業が企画されていた時期だった。『図書館史稿』の「編集にあたって」に詳述されているが、残念ながらこのプロジェクトは途中で断念された。しかし、『図書館史』が刊行された 1970 年以降の激動の時代について知る人は減っている。現に執筆をしながら思ったことだが、記録に残る出来事に肉付けできるのは、実際にその時代に図書館員として仕事をし、議論をしてきた人だけだろう。図書館旧館 100 年を前に、再び『図書館史』続編を作るという機運が生まれ、プロジェクトが立ち上がった。慶應義塾全体の図書館史ではなく、三田キャンパスのみの図書館史とし、そのために「稿」をタイトルに付与することにした。以下、苦勞も含め振り返る。

2 新「図書館史稿」プロジェクト始動

三田メディアセンター事務長以下 5 名が集まり、最初の会議が開かれたのは 2011 年 4 月上旬だった。刊行は予算の都合から年度内厳守。厳しい日程であることは百も承知で、「稿」であるということをエクスキューズに、とにかくまとめることが第一として始まった。

まずは起こった出来事を年表形式にしてまとめ、それをたたき台に本文を書き始めることにした。出来事を抽出するのに使ったのが『慶應義塾年鑑』、『八角塔』、『KULIC』、『Medianet』、新聞各紙である。この頃は時期的に余裕もあったため、年表ができ次第、各トピックについてはその業務についてよく知る職員に執筆を依頼すればよいくらいに思っていた。

同時に印刷・製本を託す制作会社の選定も行った。A5 判、縦書き(2 段組)、本文・付録で 270 頁程度、カラー口絵 8 頁、1000 部で相見積を取り、最終

的に株式会社毎日コミュニケーションズ(現・マイナビサポート)に依頼することになった。

図書館にとって 4、5 月は非常に忙しい時期だ。ようやく年表が形になってきたのは、もう梅雨が明けようとする頃だった。そろそろ本文の執筆に取り掛からなければ、間に合わない。大枠のできあがった年表を精査した上で、メディアセンターの前身組織である研究・教育情報センター発足(1970 年)、新図書館への移転(1982 年)、KOSMOS 稼働開始(1992 年)、KOSMOSII への移行(1999 年)、創立 150 年(2008 年)を大きな節目考え、この間を 5 章に分け、1970 年以前の研究・教育情報センター発足までの前史を 1 章加えて 6 章立てと決めた。年度内の刊行という時間的制約を考慮し、編集委員が各章を受け持って執筆することになった。

3 本文執筆開始

実際に執筆を始めてみると、出来事の羅列では全く文章にならないことが分かる。編集委員のうち 3 人は 1970 年には生まれてもいない。社会環境も大学の雰囲気も知らない時代の歴史を、年表に書かれた一行の事実だけで書くことはできない。当時図書館で仕事をしていた方たちにお話を聞き、記録や議事録など、刊行されていない内部資料を確認し、さらには管財部や広報課の倉庫を漁り、一次資料を探して執筆にあたった。特に管財部の倉庫は「漁る」という表現がぴったりだった。書架へのアクセスを阻む段ボール箱をかき分け、年代順に並んでいない書架を懸命に探した揚句、実は欲しかった図面が離れた段ボール箱の上に無造作に置かれていたということもあった。一方で重要な資料が残っているのやはり管財部の倉庫だった。編集が始まった頃に管財部の倉庫で手に入れた旧図書館の立面図は非常に趣のある図で、早くから表紙に使うことが決まった。

梅雨が明ける頃には、編集委員会の会合回数も月 2 回以上となり、作業は急ピッチで進むようになった。まずは、本文と異なる表組を行う年表と、本文とは関係のない巻頭の口絵を先に入稿することにな

り、写真等の選定を行った。年表の修正や、写真の選定のために編集委員で集まると、当時の様々なエピソードを聞くことができ興味深かった。そうした無駄話の中から作られたのが「こぼれ話」だ。

「こぼれ話」として、本文に残すほどではないけれども、図書館の歴史の中で起こった面白いエピソードを半ページ程度の囲み記事として執筆してもらおうと、いくつかの項目が抽出された。最終的に11のエピソードが本文の間に差し込まれることになり、編集委員以外にも執筆を依頼した。

通史以外に第2部として各論を作ることは、最初から編集委員の間で話題になっていた。特にレファレンスサービスについては『図書館史』であまり触れられていないことから、慶應義塾図書館のレファレンスルーム創設期からの歴史を、各論の1章として書くことは決まっていた。さらに、通史の本文を書き進めていく中で、通史の中に書き込むと分断されて分かりにくくなってしまいうテーマや、別章として書いたほうが書きやすいテーマについて、独立させて執筆することになった。1970年代以降、図書館界での最大のテーマであった「機械化の歴史」、好不況の波と変動為替相場場に振り回されてきた「図書予算」、福澤諭吉ともゆかりのある丸善株式会社の協力で長年続けてきた「貴重書展示会」、そして図書館員の育成ために行われてきた「海外研修」がテーマとして抽出された。

4 編集と校正

早くから形ができ上がっていた年表を入稿したのは9月中旬だった。また口絵についてもその翌月に入稿した。Excelファイルで作られた年表は、入稿前に編集委員が年号や事項などのチェックを細かく行ったつもりだったが、実際に校正刷りができあがってみると、かなりの修正が必要だった。例えば、年の区切りを「年度」にしたため、実際は1999年1月に行われていることが、年表上では1998年度であることで混乱が起こっていた。『義塾年鑑』では目録遡及事業の細かい歴史が抜けていることも判明した。そうした事項の追加・修正で初校は真っ赤になった。年表については最も苦勞したという印象がある。その後5校あたりまで修正が入り、制作会社には多大な迷惑をかけた。

本文の原稿がほぼできあがり、編集委員以外にも

目を通してもらうと、図書館員あるいは三田メディアセンター内でしか通用しない特殊な言葉遣いが多いことを指摘された。例えば「書誌調達」など、実際に業務で関わっていない限りは字面を見ても理解できないような言葉があり、その修正作業が行われた。本文がようやく形になり入稿したのは年末になってからだった。

入稿が完了し、校正刷があがってくると、ページの区切り調整が必要になった。章と章の間で白紙が出ないように、「こぼれ話」や写真などの配置換えを行った。当初は関連する章の後ろに配置されていた「こぼれ話」は、章間のページ調整などのために、若干入れ替えをするものが出てきた。

5 おわりに

1970年からの慶應義塾図書館の歴史をひも解く作業を行い、改めてこの図書館は常に先導者であろうとし、新しいサービスを次々と取り入れていく成長力を持っていることを実感した。また、新しく導入されたサービスをただ維持していくのではなく、時流に合わせてそれを更新し、あるいはまた次のサービスへと乗り換える柔軟性もある。しかし、刻々と変化するサービスが、いつ変わったのか、なぜ当時の図書館員たちは、それを選択したのかを知ることのできる資料は案外少ない。機械化が著しく進んだ時期であることが災いし、当時のフロッピーディスクには残っていたと思われる資料もプリントアウトされていなくて読めないとか、組織編成が変わったために議事録などの資料が一か所にまとめられていないなど、資料集めに苦勞した。事後の報告書作成は地味な作業であるが、すべてでなくても、物事を決断する会議の議事録や、決定事項・仕様書などは、後で読んでも分かる形で残していく必要があることを痛感した。それは次のサービスを考える上でも参考となるだろうし、大学図書館の歴史を知る上でも重要な資料となるに違いない。

『図書館史稿』はあくまで「稿」である。抜けている部分、修正すべき部分がたくさん残っていると思う。これをたたき台に、きちんとした『続・慶應義塾図書館史』が作られることを願ってやまない。

最後に、本文の執筆にあたって、図書館内外の多くの方にご協力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。